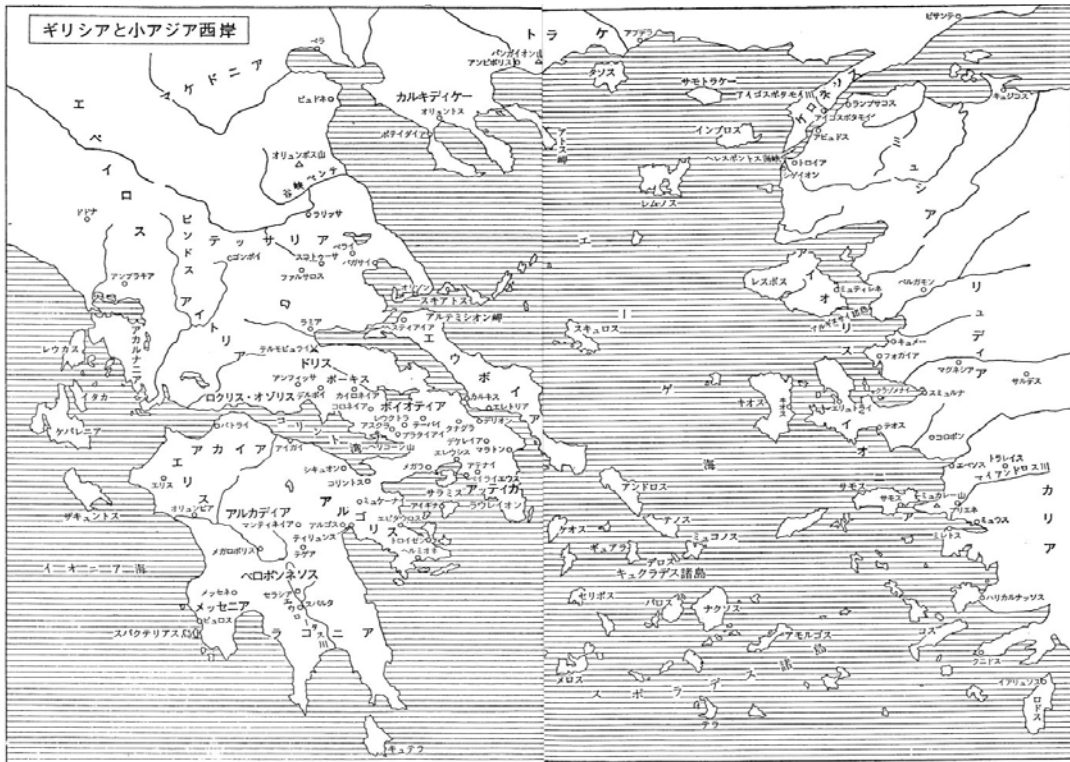


哲学の始まり



『ギリシア思想家集』世界文学大系 63、筑摩書房から

「哲学」 **filosofia** という語はホメロス（前 8 世紀後半）やヘシオドス（前 700 年頃）には見いだされない。Herodotos においては、一度だけ、その動詞形が用いられている。

ヘロドトス『歴史』第一巻 30

[コンテキスト]

小アジア、リュディアの中心都市サルディス **Sardij** の王、クロイソスはアテナイからの客人ソロンに問いかける。

[訳]

アテナイの客人よ、われわれのところにもあなたの知恵と諸国遍歴の噂はかずかず届いております。あなたが知を愛して見んがため、大地をめぐりめぐって来られたと。

トゥキュディデス『歴史』第二巻 40

[コンテキスト]

戦没者追悼演説のなかでペリクレスはアテナイ人の美德をたたえている。

[訳]

われらは美を愛して節度をわきまえ、知を愛して脆弱に陥らない。

ヘラクレイトス 断片 35 (Clem. Alex. Strom. V, 14, 140)

[訳]

知を愛するひとは実に多くのことを知っていなければならない。ヘラクレイトスの言うように。

以上がわれわれの手にしているもっとも古い証言である。ソロンとペリクレスの用例は動詞、ヘラクレイトスでは形容詞が用いられている。

時代は下るがキケロはピュタゴラスについて次のように伝えている。キケロの出典はプラトンの弟子ポントスのヘラクレイデスである。

キケロ『トゥスクルム対談集』第五巻 4,8-10

[コンテキスト]

「知を愛するもの *philosophus*」という名の由来について。ピュタゴラスまで、事物の真実を観察することにたずさわったひとびとは *sapiens* と呼ばれていた。ところがあるとき、ペロポネソス半島の都市 Phlius の王 Leon が Pythagoras にどのような知識をもっているのかをねた。これに対してピュタゴラスは「知を愛するものである」と答え、それが人生の一つの生き方であることを説明した。ピュタゴラスは、名前の創案者であるだけでなく、ことがらそのものを豊かにしたひとでもある。

[訳]

あなたはいったいいかなる学芸を身につけておられるのか、と問うたのに対し彼は、自分はいかなる学芸も知らない。だが哲学者である、と答えた。この新しい名に驚いたレオンは、いったい哲学者とはどのような人々か、他の知者とどこが違うのか、と問うた。これに答えてピュタゴラスは、人間の生は全ギリシアが集い競う祭典に例えられよう。ある人々はそこに鍛えた肉体をもって勝利の崇高な栄誉を求め、またある人々は売買の利得のためにやってくる。だがその中に全く別の人々がいる。彼らこそ、もっともすぐれた人々であり、彼らはただ見んがために集まり、何がどのように行われるかを熱心に見守るのである。これと同じようにわれわれも、他の町々から祭典を祝うため集うが如く、他の生からこの世に集い来ったのである。・・・ある人々は栄誉に仕え、ある人々は金銭に仕える。だがまれに他のことはものともせず、ただ事物の本性を熱心に見つめる人々がいる。この人々をわたしは知恵の探求者、すなわち哲学者と呼ぶのである。

Herodotus c.484-before 420 BC アテナイの Thurii への植民団に参加。(444/3)

Thucydides c.460/455-c.400 BC

Solon 594-593 BC 正アルコン。アテナイのアルコン。改革の後、十年間、アテナイを離れ旅に出たと伝えられる。

Pythagoras, fl.531 BC Samos から Croton へ移住。

Heracleitos fl. c.500 BC

Pericles c.495-429 BC

Clemens Alexandrinus AD c.150–211/215